

# 明治期における日蓮宗布教誌・機関誌に関する一考察

安 中 尚 史

## 一、はじめに

宗派や僧侶が文書を用いて布教する形態は、江戸時代以降大きく変化した。江戸時代以前の文書を用いた布教は、手書きの文字や画像が中心で、宗派内の僧侶や檀信徒を主な対象とし、その範囲は限られていた。やがて江戸時代になると、出版文化の発展によって、比較的内容に宗派や僧侶の教えなどが広められるようになり、その対象も拡大した。もちろん、幕府の宗教政策や社会情勢の安定、さらには受け入れる人々の理解度が高まるなどの要因があつたことだが、教えの流布に出版文化の進展は大きな影響をおよぼした。

その後、明治維新期になると欧米諸国から新たな印刷技術が流入し、文明開化を背景に近代的な出版文化が日本の中で生まれ、江戸時代に比べて容易に廉価で大量の出版物の発行が可能となった。発行主体は、

宗派や僧侶、在家の檀信徒や仏教者、さらには商業目的も加わり、様々な発行者によって出版物による布教が展開した。こうした中で、宗派や行政の情報を伝達する手段にも出版物が用いられるようになり、特に定期的に刊行される専門の逐次刊行物、いわゆる雑誌・新聞などの中でその役割が果たされた。

近年、明治期に刊行が始まった宗教系の雑誌・新聞に関する研究が盛んに行われている。その中で吉永進一氏を研究代表とする「近代日本における知識人宗教運動の言説空間―『新佛教』の思想史・文化史的研究」(科学研究費課題番号二〇三三〇〇一六、平成二十(二〇〇八)―平成二十三(二〇一一)年度)、大谷栄一氏を研究代表とする「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」(科学研究費課題番号二三三三〇〇二二、平成二十三(二〇一一)―平成二十六(二〇一四)年度)、星野靖二氏を研究代表とする「明治前期の宗教をめぐる言説空

間の再検討―宗教メディアの横断的考察」(科学研究費課題番号五〇四五三五五一、平成二十七(二〇一五)―平成三十(二〇一八)年度)などが成果を上げており、それぞれ著書・論文・学会・ウェブサイトなどで公表されている。

この中で吉永氏を代表とする研究は、仏教雑誌『新佛教』とそれを発行した新仏教徒同志会の活動を通して、当時の進歩的な仏教者の行動と思想について明らかにしたものであった。また、大谷氏を代表とする研究は、戦前の宗教雑誌の発掘と収集、収集した雑誌目録と目次のデータベース作成、作成したデータベースの公開、データを分析した研究成果の発表等が行われ、そのうちの明治期に創刊された仏教雑誌・新聞の発掘では、八百九十六点におよぶ雑誌・新聞の所蔵先を明らかにし、さらに三十点の雑誌目録を作成してウェブサイトで公開している。さらに、星野氏を代表とする研究は、明治七年に刊行が始まった仏教雑誌『明教新誌』(前身は『官准教会新聞』)を研究の中心の一つとして位置づけ、目次作成と論説内容の検討が行われ、特に『明教新誌』の目次データについては、明治十二(一八七九)年から明治二十(一八八八)年までをウェブサイトで公開している。

このように明治期に刊行が始まった仏教雑誌に関する研究は、最近では盛んに行われるようになったが、日蓮宗・日蓮系宗派に係る雑誌の研究はごく限られていた。そうした中で、日蓮主義研究の視点から、本多日生が主宰する統一団が刊行した『統一』や、田中智字が

主宰する国柱会が刊行した『妙宗』等の雑誌を取り上げ、本多・田中の行動と思想を研究したものは存在する。さらに筆者が明治期における日蓮宗の動向を明らかにする中で、『妙法新誌』、『日蓮宗教報』、『日宗新報』に関する考察は若干であるが行っている。

この三誌については、明治期の日蓮宗および日蓮系宗派の動向を知る上で、基本となる必要不可欠な資料である。各誌の所在については、立正大学図書館を中心に、身延山大学図書館、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター、同志社大学図書館、大谷大学図書館など、数ヶ所の機関に散逸して遺されていることしか確認できていない。また、その内容を知ることが容易ではなく、先に紹介した「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」においても明らかにされていない。こうした中で筆者は「明治期における日蓮宗布教の近代化と文書伝道」(『印度学仏教学研究』第六十七卷二三号所収予定)において、『妙法新誌』と『日蓮宗教報』の編集・刊行の体制などを中心に考察し、明治十三年から始まった日蓮宗の布教誌による文書伝道の一端を明らかにした。さらに本稿では、『日蓮宗教報』の後継誌である『日宗新報』の刊行について考察することによって、明治期における日蓮宗の機関誌・布教誌の実態について明らかにしたい。

## 二、『妙法新誌』の発刊

先に記したように、本稿では日蓮宗の機関誌・布教誌の実態を解明

することを目的に、『日宗新報』の刊行について考察をするが、その前に、日蓮宗の布教誌の先駆けとなった『妙法新誌』と、『日宗新報』の直接の前身である『日蓮宗教報』について、それぞれの刊行に関わる実状を本章と次章で確認する。

日蓮宗の布教誌として、明治期に初めて刊行されたものに『妙法新誌』がある。明治十三（一八八〇）年四月、浅草新旅籠町の雲錦社<sup>〔1〕</sup>が毎月二回（十三日・二十四日）、読者の主な対象を日蓮宗の信者とし、日蓮宗の現状をより一層理解させる目的で刊行した。そのことについて創刊号に次のように記されている。

本宗ニ関係アル布達及ビ各寺ノ願何届照会ノ書類ニ至ルマデ悉皆信徒ニ諒知セシメントス是吾輩ガ信仰ノ微意ヨリ出テ妙法新誌ヲ刊行スル所謂ナリ<sup>〔2〕</sup>

具体的には、日蓮宗内の人事・新寺建立・寺号公称・廃寺復旧・移転再興に関する通達や、「雑報」として日蓮宗に係る様々な情報、さらに「日蓮聖人伝」などで誌面が構成されていた。この創刊号最終頁に二十九ヶ所の「妙法新誌売捌所」が記され、その内訳は東京二十ヶ所、大阪三ヶ所、京都二ヶ所、横浜、水戸、名古屋、甲府に各一ヶ所で、また郵送によって購読することも可能であったことから、読者の範囲を広く設定したことが伺える。

その後、創刊から一年九ヶ月を経た明治十五（一八八二）年一月、発行元である浅草の雲錦社を芝区二本榎本町の円真寺に移転して社名

を広宣社に変更し、加えて日蓮宗僧侶の斉藤日一が編輯長に就任することになった。この円真寺は日蓮宗大教院が置かれていた承教寺に隣接する寺院で、さらに新編輯長が日蓮宗の行政を担当する宗務局員であったことから、『妙法新誌』の発行に日蓮宗が深く関わり始めたことが理解できる。また、発行回数についても月二回から三回に増加して、信心増進を促すために誌面の充実をはかるものとしていることが次のように記されている。

然るに僥倖にして諸君の愛顧を蒙り毎月二回の発兌も既に流れて第三十八号を刷するに至れり且つ毎刊会計課より部額増加を報するは吾曹深く購求諸君に謝せざる可らざる所否之に答ふるの義務無かる可らず爾乃本年一月五日更に本社を芝区二本榎元町第三番地へ遷し廣宣社を改め本宗の局員斉藤日一氏を聘して編輯長とし更に一回の発兌を増加し益々精勵して碩徳の説教先師の遺稿等の信心増進を促すへき者は普く網羅して之を掲載し一宗の光輝を揚讃せんとす<sup>〔3〕</sup>

こうして編輯長に斉藤日一が就任し、『妙法新誌』と日蓮宗の関係が強められたが、明治十五年五月二十三日発行の同誌五十二号に掲載された記事が原因となつて、斉藤は誹毀罪、今日の名誉毀損で訴えられてしまった。判決は「重禁錮廿日罰金六円<sup>〔4〕</sup>」が下され、斉藤は職を辞し、社主の鹽井高富が編輯長を兼任して発行が続けられた<sup>〔5〕</sup>。

このような事件があつても『妙法新誌』の発行は続いたが、創刊か

ら四年七ヶ月後の明治十七（一八八四）年十一月十三日に発行した第百二十三号を最後に、その後の発行号は確認できないまま今日に至っている。

### 三、『日蓮宗教報』の発行

明治十八（一八八五）年十二月三日、日蓮宗教報社によって『日蓮宗教報』が創刊された。先に記した『妙法新誌』との関係については、創刊号に広告として次のように掲載されている。

妙法新誌の儀はこの教報発兌の後は之に合併発刊仕候間此段広告仕候也

明治十八年十二月三日

妙法新誌社主 鹽井高富  
教報本局 教報社<sup>6)</sup>

この内容から、『妙法新誌』の後継誌として『日蓮宗教報』が発行されたことを伺い知ることができる。さらに、同号に日蓮宗教報社監督に就いた岡本柳之助によって趣意書が掲載され、時代に適応した布教方法の一つとして新聞を用いることが有効であり、そのために日蓮宗から協力を得て本事業を遂行することが述べられている。一方、創刊号から第三号まで無料配布して購読者を獲得するための措置がとられたり、より多くの檀信徒に本誌の内容を広めるために、寺院住職に対して檀家三十軒から四十軒毎に一部、二部を購入して回覧を希望する働

きかけもしている。

また、明治十八年十二月二十一日付で日蓮宗宗務院から出された通達では、日蓮宗からの告知等に関して本誌で行うことが表明され、機関誌の機能を備えるに至ったことが理解でき、そのために寺院の購読を必修とし、加えて檀信徒に宗義の要旨を簡易に説示して信心の倍增を目的にしている。<sup>7)</sup>

本誌は日本橋牡蛎殻町に置かれた日蓮宗教報社から、一ヶ月に六回発行され一部二錢五厘、一ヶ月前金十五錢を頒価とした。創刊号の目次を見ると「日蓮宗宗務録事」といった宗派からの通達や、「高祖大菩薩御伝記」「日親上人御伝記」などの読み物もあった。さらに多くの漢字に振り仮名が付されていることから、本誌の読者層を広く設定しようとしていた意図を読み取ることができる。

その後、発行に関わる人たちの体制が変わりながら誌面の充実がはかられ、特に明治二十年一月から一ヶ月六回の発行を十回に改めることが「社告」で発せられた。その中で「一層布教拡張の実効を相立度候」とあり、発行回数を増加することによって、布教の拡張を行おうとしたことが理解できる。<sup>8)</sup>

このように発行回数が増やされてからも、発行に関わる人たちの交替は続いた。<sup>10)</sup> 一方、日蓮宗教報社の社員と騙って購読料金を集金する人物が現れたり、<sup>11)</sup> 料金未納者の増加や、<sup>12)</sup> 発行部数が創刊時の二万部から二年後には八百部にまで減少するなど、<sup>13)</sup> 経営状況は悪化の一途をた

どり、一年で発行回数を一ヶ月六回に戻して経営の立て直しをはかろうとした。

こうして『妙法新誌』との合併によって発行が始まった『日蓮宗教報』は、明治二十一（一八八八）年十二月の発行を最後に、その名称を『日宗新報』に変更して再起をはかることになった。

#### 四、『日宗新報』の発行

明治十八年十二月に日蓮宗の機関誌・布教誌として発行された『日蓮宗教報』は、明治二十二年一月八日発行の『日蓮宗教報』二百二十五号で、その名称を『日宗新報』に改めることなどが、本号一頁に通常使用している文字の四文字分に相当する大きさで次のように記されている。

本回ヨリ日宗新報ト改題致スヘキ手筈ナリシカ其筋ヘ届出ノ期限ヲ誤リ不得止次号（十三日発兌）ヨリ改題決行スル事トセリ依テ此段購読諸氏ニ告ク

附タリ改題延期ニ付改題祝詩附録ハ次号へ譲ル

這般本社主幹伴俊学退社已後本社へハ毫モ関係無之候条此段購読諸氏ニ告ク<sup>(15)</sup>

本来ならば明治二十二年の発行号から『日宗新報』に名称の変更を行うことになっていたが、役所への届け出での期限を間違えたことによつて、同年一月十三日号からの変更になることがわかる。また、それま

での主幹に対して、今後の関係を一切断ち切ることも読者に告げられていることから、名称変更や経営方針に関して社内で見解等の相違があったことも想像に難くない。さらに、明治二十二年一月十三日に初めて『日宗新報』の名称で発行したものは、その号数を『日蓮宗教報』からの累計とし、さらに同号の中で「社説」として次の記載がある。

本社が屢衰境に陥り未だ幾年ならざるに其沿革数回に及びたるものその原因一ならざれども多くは内外組織の不完全にして基礎の確定せざりしが故ならざるはなし此を以て宗務院が創業の際番外達を以て一般寺院信徒に対し購読勸奨を為せし者なるに拘らず多くは教報を購読せざるのみならず爾后合せて教報社の名を聞くことと蛇蝎の名を聞く如く其名を惡むも挙げて其体を惡むに至りたり<sup>(16)</sup>日蓮宗教報社が衰退した要因は基礎を為さずに組織が不完全であったことにあり、日蓮宗宗務院が通達で寺院・信徒等に購読を勧めても、それに応じなかったことに加え、かえって悪い印象を与える結果を招いたとしている。さらに

蓋し名と体とは相伴ふ者にして須臾も離る可らず元來二にして不二の者なれば其体を惡む者は其名をも惡み其名を惡むときは挙げて其体を惡むに至は自然の理然らざるを得ず是を以て教報其名を惡む為め其体を惡むに至る亦宜ならずや之れ誠に本社改題改名の必要起る所以なり夫れ本紙は日宗唯一の機関新誌にして亦日宗真理拡張の良材なり故に本誌の不振は寧ろ日宗の不振を代表するも



のなり<sup>(17)</sup>

として、社名と誌名を変更することによって不振から抜け出す方策として、その必要性を説いている。加えて日蓮宗の中で唯一の機関誌であることから、本誌の不振は日蓮宗が不振であることを意味するような表現もしている。

この社名・誌名の変更について、若き清水龍山が次の文書を寄せている。

抑も新聞なる者は社会を視察するの明鏡にして彼此の事実を照し諸方の宗況を載せ之を報ずる者なれば信徒に僧侶に座右一日も欠くべからざる者なり然るを況んや紙上亦た一層の改良を加へ題を日宗新報と改むに於ては余豈に新年を祝すると共に改題の美挙を祝すざるを得んや

雖然改題に先ちて一言社員諸氏に呈せざるを得ざるあり夫れ新聞の世出共に必要な所以は其の体裁と命題とにあらずして寧ろ其主義にあるのみ故に這般体裁を改良し命題を改むると共に其主義をも一層改良して苟も宗家に益あるとを見做せば公平なる眼椽大の筆を執つて諱む所なく憚る所なく充分論及し以て輿論の標準を作られんとを望むのみ<sup>(18)</sup>

この清水龍山とは、近代における日蓮教学の正統継承者として日蓮宗内外から認められ、日蓮宗大学林・日蓮宗大学・立正大学において五十年以上にわたって教育に携わり、立正大学第八代・第十一代学長を

歴任している人物である。清水はの中で僧侶・信徒に対して新聞の重要性を説き、さらに新聞を発行するには体裁や名称ではなく主義が必要であり、その主義を改良して宗内に利益を与えるようなすぐれた文章を書くように望んでいることがわかる。

また、本誌の発行回数『日蓮宗教報』と同じく一ヶ月六回、頒価については

這回より紙面狹隘に付二枚八段を増加し代価を旧に復し一部二錢五厘とす去れど今度より前金にて一ヶ年又は半ヶ年分御払込になれば相当の割引致すゆへ先と比較するに半ヶ年にて十六錢一ヶ年には十四錢しか増しませぬ<sup>(19)</sup>

として、紙数を二枚増加した頒価は『日蓮宗教報』発行当初と同一に戻し、半ヶ年もしくは一ヶ年分を前金として支払う場合には、それぞれ以前と比べても半年で十六錢、一ヶ年十四錢の増加であることが記され、購読に関わる割合の良いことを強調している。

さらに先述の通り『日蓮宗教報』発行中にも起きたが、日蓮宗教報社の社員と騙って購読料金を集金する人物が現れたことに対して注意を促す告知が次のように記されている。

近來本社々員と騙り代価を受取るの惡漢も之有候由なるか本社は郵便を以て御送付申上候方へは教報代価受取人別に相遣し不申候間如可様なる口実証明等相添へ候とも決して御渡被下間敷此段願上候<sup>(20)</sup>

加えて、『日蓮宗教報』からの未納代金の請求も『日宗新報』の誌面を通じて「本社新報代価昨年迄の分未だ御払込なき向も有之帳簿取纏上甚だ問支候間何卒便宜御払込被成下度奉願上候<sup>21)</sup>」というように行われていることから、本誌発行に関わる資金面の問題について、名称変更後も継続していた。

## 五、『日宗新報』の改良

『日宗新報』に改題してから一年七ヶ月後の明治二十三（一八九〇）年八月三日発行『日宗新報』第三百三十八号に「紙面改良に就て謹で看官諸君に告げ奉る」と題し、その内容を改めることについて長文を掲載している。その中で

一千日間の新報一紙だも終に活動の生面を諸君の憐眸愛顧に献ぜし事なく一功だも全く諸君に尽したる者を誇揚するに足る者あるなし嗚呼本社新報の罪を諸君に負ふや実になりと謂ふべし<sup>22)</sup>。

と述べ、『日蓮宗教報』発行以来、読者に有益なものを一度も発行することができず、迷惑をかけたことを理由に、紙面の改良を実施する旨が綴られている。さらに、同号には「本社が向來執る所の主義を告白す」として、次の三点を掲げた。

本社新報は一宗内各派に対しては教義の大同を成さんことを目的となす

本社新報は諸宗余教に対しては折伏の主義を執る

本社新報は政教一致の意見を執る

右三章は爾來続々本紙に掲載する者とす<sup>23)</sup>

その中で、第一番目に掲げている「一宗内各派」は、日蓮系各派を指すものと思われ、「教義の大同」つまりは教義を一つにまとめることを目的とすることが示され、後に展開する日蓮門下統一に直接つながる宣言であることが考えられる。さらに他宗派他宗教に対する折伏や、政教一致の立場をとるなど、後に田中智学が標榜する「日蓮主義」に通じる方針を、日宗新報社は明らかにしたことが理解できる。

この背景には、明治二十三年の国会開設に向けて日本国内ではこれまでに見られない程の政治活動が展開し、特に自由民権運動の中であった大同団結運動に擬えての主張とも捉えることもできよう。また、日蓮宗内では明治二十一年から激化した祖山を中心とする中央集権体制の確立を目論む改革派と、永年にわたって保っていた本山の権限を維持しようとする保守派との対立の最中でもあった。これまでの『日蓮宗教報』や『日宗新報』は、布教誌・機関誌としての役割を果たすために、敢えてその主義を主唱することがなかったのであるが、明治二十三年八月の紙面改良によって自らの主義を強く唱えたことの要因として、清水梁山が編輯者として加わったことからであろう。

清水梁山は、元は新居日薩の門下であったが、後に日薩の学風を批判して破門されたという。日蓮主義や天皇本尊論などを主張したことにより、明治後期から昭和初期にかけて時代に即応する教義として、

一部の右翼的な思想を持つ人たちには受け入れられたが、宗内における正統学派である充治園学派からは受け入れ難かった。『日宗新報』の編輯に携わった頃には、その主張は誌面を通して見ても日蓮主義が中心であった。

さらに、「本社編輯規約」として、具体的な編輯の方針を次のように述べている。

日蓮宗々務院録事は旧に仍りて之を掲ぐ尚更に各派の録事をも併せ載すべし然れ共此宗務の当否に対しては本社の意見を述べず

一宗内の事項は善美の行為の非ざれば掲載せざるが故に宗内の人士を罵詈誾する如き通信は本社に於て之を没収すべし投書欄内には何等の事たりとも掲載さるべし然れ共本社は其責に任ぜず尤も取捨の権は編輯人に在るべし

本社は本社が告白する主義を表明するの他は一切中立不偏の地に立つものなれば何等の事たりとも毀誉褒貶の筆鋒は本社之を執らず<sup>(24)</sup>

これまで、具体的な編輯の方針が読者に対して示されたことはなく、「紙面改良」を宣言し、本誌を改めたことを広く知らしめられたことが理解できる。

このような『日宗新報』の改良に対して「本社改良の挙を随喜せられ金田御寄附相成候人名左の如し」とし、寄付金額と寄附者名が誌面に記載されていたり、「本社が告白したる主義に就き諸方より賛状を本

社へ寄せられたるものとまた主唱清水梁山氏の許へ直に飛信を通ぜられし者とを併せて今茲に掲ぐ尚爾来統々掲載すべし 日宗新報編輯局<sup>(25)</sup>として改良に対し、読者が寄せた評価の文書を掲載している。

また、本誌の主義に見られる「教義の大同」については、清水梁山の名で「日蓮宗教義大同合一論」とし、管見の限り七回の掲載が確認できる。<sup>(26)</sup> この考えに賛同した僧侶や信徒達は、各地で支援組織の設立が検討され、その中で「本宗大同安中俱樂部」が創設された。

本宗教義大同合一実行の爲め地方俱樂部の組織先づ成る 本宗各派教義の大同合一は本社已に之を主義と定め統々意見を陳述し居る事は諸君の夙に了知するところなるが爾来各地方より先其要領を聞かんと申込まる、者多く本社は一々之に回答し来りしが群馬 俣碓氷郡安中駅本宗信徒は頗る此挙に賛成し去十九日主唱清水梁山氏を招請し種々熟議の上遂に本宗大同安中俱樂部を組織し<sup>(28)</sup>

このように、主義を誌面で表明してから一ヶ月も経過しないうちに、主唱者である清水梁山が招かれ、協議されての創設であったことが理解できる。さらに清水梁山が日宗新報社の監督として、編輯の責任者に就いたことが次の記載からわかる。

#### 社告

今般社内改革仕り次号より清水梁山氏を監督となし社主始一同相換らず勤勉従事可仕仍て爰に本社役員を掲げ尚次号よりの編輯制規其他社則等御高覧に呈し置き候



監督 清水梁山 社主塚原洞清 持主鎌倉恭侯 編輯人長浜光  
次郎 同加藤容余<sup>(28)</sup>

こうして、これまでにない積極的な誌面の改良が実施されたのであったが、かえって読者からの批判を招くことになってしまったことが、『日宗新報』に掲載された次の文書から理解できる。

就中去る八月清水梁山入社已来其の不幸に逢へるハ最も甚だし愜いに改良を唱へて改良改良又た改良と改良を悪しといふには非ざれども這般の改良ハ却て改良せざるに勝る、と幾層なり是れ夥多の購読諸君が愛顧の余り日々この非分を直接に芳墨に御志告<sup>(29)</sup>ある所以にして我輩ハ諸君に向て謝罪の為す可き様を知らず然れども強て梁山に対して此の非を論じて改良説を破毀す可らざるの内情あり故に購読諸君の嫌忌を知り又忠告諸君の思召を喜びながら彼か説に従ひ日夜怏々として唯だ購読諸君に面するを愧ぢ恐るゝのみなりき

然るに幸なる哉梁山自ら失敗を悟り去る十一月廿一日全く本社を退身せり是に於て現社員集合し始めて喜悅の眉を開き梁山の成規を悉く撤し更に旧則を斟酌して新則を設け齊藤日一氏を聘して之が主筆を委託し購読諸君の御望みに随ひ紙面の体裁を旧に復し記事を稍や善良に改め以後ハ社員拳ッて発兌の期日を誤らざらんことに注意し損こねし諸君の清意を医し進らせんとす諸君本社既往の罪過を海容あり猶ほ旧に依て甚深の御愛顧を賜はらんことを伏

して冀ふと云爾<sup>(30)</sup>

これによると、清水梁山は紙面の充実をはかるために改良を繰り返して唱えて実施したが、その行為はかえって読者からの批判を受けるようになった。さらに社内でも不信感が募っていたようで、これらの責任をとるようなかたちで明治二十三年十一月に退社し、『妙法新誌』の編輯者であつた齊藤日一が主筆として迎え入れられたことを報じている。

一方、清水梁山が退社した後の誌面については、日蓮宗の機関誌として立場をふまえた内容で誌面が構成され、「日蓮主義」や「教義の大同合一」を本誌の主義として主張することは無くなった。

その後も、明治二十四年三月に編輯員の増員や社屋の移転<sup>(31)</sup>、明治二十四（一八九一）年十二月に発行回数削減や誌代の前金制<sup>(32)</sup>、さらに明治二十五（一八九二）年三月に主筆飯田鎮雄と社長柴田貞勝の交替<sup>(33)</sup>を実施して誌面の充実と経営の立て直しがはかれたり、明治二十六（一八九三）年五月には一ヶ月の休刊の後に

今回の改発は従来の改良改良と云ふものと日を同ふして語るべからず、ツマリ日宗新報は従来の日宗新報に相違なきも、生れ変りたる新報社にして、且や内部には多数なる某々有力者の加担せるをや<sup>(34)</sup>

を発表して、これまでの改良とは異なることを強調した。事実、社屋の移転、誌面の体裁、頁数の大幅な増加、海外在留者への無料送付、古典籍の翻刻、通信員の設置など、確かに従前の改良に比べても大き

なものであった。

## 六、『日宗新報』の再改良

先にも記したように、明治二十六年五月に行った『日宗新報』の改良は多岐にわたり、日宗新報社の運営に影響がおよんだことは確かであったが、これとは別に購読料を滞納する読者が日宗新報社の経営に影響を与えていた。この滞納の件について同年十一月十日発行の『日宗新報』において、読者に対して次のような社告が掲載された。

### 緊要社告

本紙改発以前より未だに御入金無之方多くあり右は諸君一個人に取りては些々たる金額に付き事の序でを以て御払込の御処存なるべけれど本社に於ては多数の事ゆゑ即ち巨額の金額と相成申候殊に改発に就ても失費多端且つ本年も最早歳末に相近づき候間社情御洞察の上至急御送金被下度此段寛望仕候

廿六年十一月十日

日宗新報社会計課

愛読諸君御中<sup>(35)</sup>

さらに同号では、日蓮宗宗務院からの購読料滞納者に対して、その送金を促していることが次の番外達から理解できる。

### 番外

日宗新報既読滞納者ニ対シ客年八月廿五日付ヲ以テ番外諭達ニ及

置候処猶又今回該社ヨリ滞納者多分有之旨願出タリ元來該新報ハ世間新聞ノ事業ト異ナリ宗教専門雜誌ナレバ其範圍ノ狹隘ナルハ勿論ノ事ナリ然ルニ既読滞納者有之候テハ該社ノ哀類ハ不及申本宗機関ノ一助ヲモ欠キ候儀ナレバ此際速ニ送金相成様致度猶縊素一般へ精々購読方勸諭相成度此段諭達候也

明治廿六年十一月七日

日蓮宗々務院<sup>(36)</sup>

このように、購読料に対する日宗新報社と日蓮宗宗務院の働きかけもあったが、引き続き読者に対する購読料の入金を求める文書が頻繁に出された。その中で「昨年迄の新報代価を御送附無之方少なからず因て直ちに尊名を掲げて広告致すべき御約束なれど特に今一回猶予して一々精算の督促葉書を差上候間右の葉書着の上は至急御送金被下度候<sup>(37)</sup>」というように、滞納者に対して誌面に実名を掲載して支払いを求めようとしていたことがわかる。

その後、先の『日宗新報』改良から二年五ヶ月後の明治二十八（一八九五）年十月、河原銀藏・加藤文雅の兄弟が新たに経営と編輯に携わることになり、以前とは全く違う『日宗新報』に生まれ変わることとを表明したのである。

今回の河原銀藏と加藤文雅が着手した『日宗新報』改良の要因は、社内にもいつも存在していた経営資金の問題にあった。経営を引き継いだ二人は、従前の経営体制との関係を一切絶つために、購読料の滞納

分を全て肩代わりしたことにについて次のように述べている。

目下革新の際費用多端にして社政甚た意の如くならず況て花主諸彦の購読料未納分は後來の關係を絶つ為便利上既に多数の金額を前社主に一時支払を為したるを以て一層困難を感じたれば杜情御洞察の上購読料未納分は勿論前金も大至急払入あらんことを希望す<sup>(38)</sup>

さらに、これまでの経営と異なる点について「宗務院の保護と特別寄書家及び社友の懇篤なる御翼賛により自今月々三回の発行を連続するものなれとも」<sup>(39)</sup>と述べているように、宗務院からの援助を受けたことである。

明治十三（一八八〇）年に発行された『妙法新誌』から明治二十八年十月の『日宗新報』改良に至るまで、日蓮宗が明確な保護を行っていることは確認できなかった。それが今回、東京芝二本榎にあった日蓮宗宗務院の中に日宗新報社支局が置かれたり、経済的な援助を受けたりしたことから、日蓮宗との関係がこれまでと違っていたと理解できよう。

加えて、この改良にあたっては河原鋳蔵が私財を投じて行ったことが「明治二十八年十月始メテ革新第一輯ヲ発行シ家産ヲ傾ケ盡シ之ヲ維持シ」<sup>(41)</sup>からわかり、また「俗兄鋳蔵君は護法堅実の人幾んど財産の凡てを挙げて日宗新報の張皇に提供し」<sup>(42)</sup>と述べられていることから、も知ることができる。

また、編輯に携わった加藤文雅は、この改良に関わった理由については、次のように述べている。

大和民族の宗教心は征清軍に従りて、大日本の膨張と共に頗る勃興せり、外国の容喙は端なくニコライ宗の洗礼者を減却せしめ、基督教徒の熱度を冷下せしめたり、而して内務大臣の一訓令に仏教各宗派を奮起せしめ、興学育英の方針を一定せしめたり、此時に當りて国家的宗教本化別頭の妙宗は、大に興学布教の規模を拡張し、内は訓令に依りて人材養生の道を講じ、外は宗教思想興教の機を利し布教伝導の術を広るめ、宗政一新、檀林合一、新日本及び海外布教の皇張等、壮絶快絶の現象は宗海の表面に躍然たらんとす、一宗の機関たり、宗海の耳目たるを任ずる日宗新報、何ぞ独り革新する所なくして可ならんや<sup>(43)</sup>

すなわち、日清戦争による国家の膨張と勃興は、仏教界にも大きな影響を与え、日蓮宗も例外ではなく、これに対応するためにも日蓮宗の機関誌として位置づけられた『日宗新報』を改良する必要が生じたことがわかる。また、この主旨に基づいて「社説」「法説」「論説」「史伝」の四項目を中心に「宗務院録事」「時事評論」「文苑」「小説」「寄書」「雑報」「講義欄」「説教欄」「祈祷」などの項目を掲げて『日宗新報』の紙面を構成することを述べている。

一方、「本社は新に日宗新報活版部を東京に設け諸般の印刷物は請々勉強廉価に親切に取扱ふを以て名紙広告刷等は多少に拘はらず御注文

を乞ふ<sup>(45)</sup>」というように『日宗新報』の発行だけでなく、印刷事業にも着手することが記されていることから、以前では見ることでできなかった他の事業への参入も進められていたのである。これは、その後の各種出版物を、日宗新報社が刊行する事業の足がかりとなったものと考えられよう。

このように、河原鋳蔵・加藤文雅兄弟が『日宗新報』の改良に携わり、紙面の充実はもちろんのこと他の事業への参入や日蓮宗との関係強化など、今までの改良では見られなかった行動によって、その後の長期間にわたる経営・編輯の体制が維持されていた。また、この兄弟は「兄弟二人幸に別に活路を有す、故に新報の利益を挙げて社運拡張の資に充て<sup>(46)</sup>」とあるように、日宗新報社を發展させるために、その利益を全て充てられるだけの経済力を有していたことも長期間にわたる維持運営がなされたことの要因であろうと理解できるのである。

## 七、むすびにかえて

本稿では日蓮宗の機関誌・布教誌について、特に『日宗新報』の発行から河原鋳蔵・加藤文雅による改良までを中心に見てきた。こうした形での布教や宗派の運営については、明治という新しい時代の中で生まれ、展開したものであり、時代に即応した活動が日蓮宗の中で繰り広げられていたといえよう。

その後、『日宗新報』の発行回数については、当初一ヶ月三回であつ

たものが、週一回<sup>(47)</sup>へと増加され、さらに、明治三十八（一九〇五）年には「革新第十周年記念号」<sup>(48)</sup>が、明治四十（一九〇七）年には「創立第一千号」<sup>(49)</sup>が、明治四十三（一九一〇）年には「革新第十五周年記念号」<sup>(50)</sup>がそれぞれ発行され、本誌は日蓮宗にとって掛け替えのない存在となった。この間、明治三十九（一九〇六）年一月八日に兄の河原鋳蔵が死亡し、明治四十五（一九一三）年五月二十七日には日宗新報社の中心人物であった加藤文雅が遷化し、遺志を嫡男の加藤文雄が受け継いだ<sup>(51)</sup>。しかし、大正時代に入ると日蓮宗宗務院から『宗報』<sup>(52)</sup>が発行され、それまでの機関誌的な役割りは『宗報』に移ることとなった。さらに多くの信仰組織からそれぞれの布教誌が発行されたことや、昭和二（一九二六）年の日蓮宗宗会で文書伝道の充実を計る決議がなされ<sup>(54)</sup>、同年八月をもつて、『日蓮宗教報』の発行から四十三年、改題してから三十八年間にわたり刊行し続けてきた『日宗新報』は終焉を迎えた<sup>(55)</sup>。

明治後期から昭和二年までの『日宗新報』の展開、さらにはそれ以降の日蓮宗の機関誌・布教誌の展開については別稿に譲るが、昭和になると日本の近代化が別な形で進展することとなり、その状況に対応するべく機関誌・布教誌も新たな動きがなされていくことになる。

## 注

(1)『妙法新誌』の創刊号奥書に社長林範平、編輯人富田豊治郎、印刷人鹽井高富の名が連なっている。この三人の詳細は不明であるが、このう

ちの鹽井高富は、『高祖遺書』（全十二巻・編輯人齊藤日一）という、明治十五年から出版が始まった日蓮遺文集の出版人として、名前が同書の奥書に記され、そのことから日蓮宗に関連する出版に係っていたことがわかる。

- (2) 『妙法新誌』 第一号二頁（明治十三年四月二十四日発行）。
- (3) 『妙法新誌』 第三十九号六頁（明治十五年一月十三日発行）。
- (4) 『妙法新誌』 第六十六号六頁（明治十五年十月十三日発行）。
- (5) 『妙法新誌』 第五十八号十二頁（明治十五年七月二十三日発行）。
- (6) 『日蓮宗教報』 第一号十二頁（明治十八年十二月三日発行）。
- (7) 『日蓮宗教報』 第四号一頁（明治十九年一月三日発行）。
- (8) 『日蓮宗教報』 第七号十二頁（明治十九年一月十八日発行）、『日蓮宗教報』 第三十四号十五頁（明治十九年六月三日発行）。
- (9) 『日蓮宗教報』 第七十二号十二頁（明治二十年一月四日発行）。
- (10) 『日蓮宗教報』 第九十二号四頁（明治二十年四月一日発行）、『日蓮宗教報』 第百六号十二頁（明治二十年五月十三日発行）、『日蓮宗教報』 第百三十三号十一頁（明治二十年八月七日発行）、『日蓮宗教報』 第百三十九号五頁（明治二十年十月十日発行）。
- (11) 『日蓮宗教報』 第百一号十二頁（明治二十年四月二十八日発行）。
- (12) 『日蓮宗教報』 第百四十二号十一頁（明治二十年十一月十三日発行）。
- (13) 『日蓮宗教報』 第百五十六号三頁（明治二十一年一月十三日発行）。
- (14) 前掲同号七頁。
- (15) 『日蓮宗教報』 第二百二十五号一頁（明治二十二年一月八日発行）。
- (16) 『日蓮宗教報』 第二百二十六号四頁（明治二十二年一月十三日発行）。
- (17) 前掲同号五頁。
- (18) 『日蓮宗教報』 第二百二十五号十一頁（明治二十二年一月八日発行）。
- (19) 『日蓮宗教報』 第二百二十六号十六頁（明治二十二年一月十三日発行）。
- (20) 『日蓮宗教報』 第二百三十三号二頁（明治二十二年二月十八日発行）。
- (21) 『日蓮宗教報』 第二百三十五号二頁（明治二十二年二月二十八日発行）。
- (22) 『日蓮宗教報』 第二百三十八号二頁（明治二十三年八月三日発行）。
- (23) 前掲同号四頁。
- (24) 前掲同。

明治期における日蓮宗布教誌・機関誌に関する一考察

- (25) 『日蓮宗教報』 第三百四十号十五頁（明治二十三年八月十三日発行）、『日蓮宗教報』 第三百四十一号十五頁（明治二十三年八月十八日発行）、『日蓮宗教報』 第三百四十二号十五頁（明治二十三年八月二十三日発行）、『日蓮宗教報』 第三百四十四号十六頁（明治二十三年九月十三日発行）、『日蓮宗教報』 第三百四十六号十六頁（明治二十三年九月十八日発行）、『日蓮宗教報』 第三百四十七号十四頁（明治二十三年九月十八日発行）。
- (26) 『日蓮宗教報』 第三百四十一号十四頁（明治二十三年八月十八日発行）。
- (27) 『日蓮宗教報』 第三百四十号七頁（明治二十三年八月十三日発行）、『日蓮宗教報』 第三百四十一号八頁（明治二十三年八月十八日発行）、『日蓮宗教報』 第三百四十二号七頁（明治二十三年八月二十三日発行）、『日蓮宗教報』 第三百四十四号九頁（明治二十三年九月三日発行）、『日蓮宗教報』 第三百四十五号十頁（明治二十三年九月八日発行）、『日蓮宗教報』 第三百四十八号十頁（明治二十三年九月二十三日発行）、『日蓮宗教報』 第三百五十号十頁（明治二十三年十月十八日発行）。
- (28) 『日蓮宗教報』 第三百四十二号四頁（明治二十三年八月二十三日発行）。
- (29) 『日蓮宗教報』 第三百五十号十四頁（明治二十三年十月十八日発行）。
- (30) 『日蓮宗教報』 第三百五十四号二頁（明治二十三年十二月三日発行）。
- (31) 『日蓮宗教報』 第三百七十三号十六頁（明治二十四年三月二十八日発行）。
- (32) 『日蓮宗教報』 第四百十四号四頁（明治二十四年十二月二十五日発行）。
- (33) 『日蓮宗教報』 第四百二十二号十七頁（明治二十五年三月十五日発行）。
- (34) 『日蓮宗教報』 第四百九十五号二頁（明治二十六年五月三十日発行）。
- (35) 『日蓮宗教報』 第五百十一号表紙裏（明治二十六年十一月十日発行）。
- (36) 前掲同号附録二頁。
- (37) 『日蓮宗教報』 第五百二十五号表紙裏（明治二十七年三月二十五日発行）。
- (38) 『日蓮宗教報』 第五百七十七号二頁（明治二十八年十月二十八日発行）。
- (39) 前掲同。
- (40) 前掲同号三十頁。
- (41) 『日蓮宗教報』 第九百四十六号四頁（明治三十九年一月十一日発行）。
- (42) 『日蓮宗教報』 第一千二十号九頁（明治四十三年十一月十一日発行）。
- (43) 『日蓮宗教報』 第五百七十七号三頁（明治二十八年十月二十八日発行）。
- (44) 前掲同号一頁。



- (45) 前掲同号二頁。
- (46) 前掲同号三頁。
- (47) 『日宗新報』第八百一十一号（明治三十五年四月二十八日発行）。なお、『日宗新報』第八百四十号（明治三十六年二月八日発行）より一ヶ月三回の発行に変更。
- (48) 『日宗新報』第九百三十八号（明治三十八年十月二十一日発行）。
- (49) 『日宗新報』第一千号（明治四十年七月十一日発行）。
- (50) 『日宗新報』第一千二百号（明治四十三年十一月十一日発行）。
- (51) 『日宗新報』第九百四十六号（明治三十九年一月十一日発行）。
- (52) 『日宗新報』第一千百八十七号十五頁（明治四十五年五月二十八日発行）、千八百八十八号十四頁（明治四十五年六月四日発行）。
- (53) 『宗報』は日蓮宗宗務院より大正五年十二月五日から発行。
- (54) 『宗報』第百二十五号五十頁（昭和二年五月十日発行）。なお、この宗会で「宗則第二十九号文書伝道規則」が制定され、その第一条に「宗門布教伝道ノ充実ヲ計ル目的ヲ以テ毎月定期一回以上教誌ヲ発行ス」とあり、『日蓮主義』として日蓮宗宗務院が昭和二年十月十三日に創刊。
- (55) 『日宗新報』第一五七八号二頁（昭和二年八月二十八日発行）。